
雨乞いの後

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨乞いの後

【Nコード】

N5925X

【作者名】

屋下雨宿

【あらすじ】

やや暗めの淡々としたお話です。碌に笑いもありません。雨乞いをする占い師と、生贄になる少女と、一緒に暮らしてきたの少年のお話。

序

そこは砂漠の城。いや、荒野の城か。

辺りの植物はすっかり枯れ果てており、砂に埋もれて見分けが付かなくなってる。

アストリア王国。

大陸の中央部にある肥沃な大草原を主な領土としており、それを
実にした畜産・狩猟を主な産業としている。また、交易の中継地と
しても栄えた国家だ。恵まれた土地から生まれる兵馬も強力で近隣
国家との争い事にも強く、国内は安定し平穏そのものだった。

しかし、それも過去の話になろうとしている。

事の始まりは1年程。北の国家の戦争が終結する頃。その頃から
徐々に雨が降らなくなり、それから半年程経つともう一滴の雨も降
る日はなくなってしまったのだ。もちろん、旱魃の被害を受けたの
はこの国だけではなく、周辺諸国もまとめて被害を被っている為、
まともに援助してくれる国すらない。

いつしか、その地域には旅人、商人も寄り付かなくなり、皆が迂
廻路を使うようになっていた。

「おじい様、いい加減に亡命を考えるべきです」

砂被りになつたままの城から外を眺めている老人がいる。それと
もう一人、その後ろに女性が立っている。お互いに外の情景からは
想像も出来ない程の装飾品の多い煌びやかなローブに身を包んでお

り、この者達の身分が高い事を誇示していた。

「いや、ワシはいい。もう充分に生きた」

「ですが、まだおじい様の頭脳は役立ちます。受け入れ重用してくれる国はあるでしょう」

「それに、この荒野を旅する体力もないじやろう。出て行きたければお前が一人で行くがいい」

「言われなくても、その予定です」

「そうかそうか。それを聞いて安心したわい」

抑揚のない調子で返すと、窓際から離れて部屋の角に置かれている椅子に腰をおろした。女性は視線で老人を追うだけでその場から動かない。

「最後に一つ、ワシの頼みを聞いてくれるか？」

「何ですか？」

「被害の出ない西の山を越えた先、国境付近にノーストリアを言う小さな村があるんじゃ。そこまでお使いを頼みたい」

「分かりました。私以外の者にいかせてもよろしいでしょうか？ 何分、忙しいもので」

女性は抑揚ない声で淡々と答えた。

「誰でも構わんよ。礼儀の分かる奴ならな」

「わかりました。今すぐに使いの物をお呼びいたしますので」

軽く一礼。それから背を向けたまま部屋を出て行く。

「ふん。恩知らずが……」

扉の閉まる音が鳴りやむと老人は不機嫌そうに独りごちるのだった。

*

ノーストリア村。

アストリア王国領内の西の端にあり王都から一般的な商隊の馬車で片道三日、人口三百人程度の村である。

けして小さな村ではないが町というだけの規模もない。また、周りを山脈に名こまれており、年間で訪れる旅人、商人の数は非常に少なく世間から隔離されているような印象を受ける。

しかし、国境付近には巡回する警備隊が多いため、盗賊山賊などが活発に動けるような地域でもない。おもな産業は狩猟。山菜と果実。猪狩りぐらいだろうか。農業を営む者もいるが自然の恵みだけでも十分に暮らしていける気候であった。

そのため、人的な災害は少ない割に、実りが多く住みやすい村ではあった。

「今、王都では極端に雨が降らなくなって河川が干からびているらしいな」

村の中心にある大きな集落の横。そこにある畑の脇で、二人の兵士が切り株に腰をおろして農作業を見守っていた。その胸当てに刻まれている紋章から村に駐屯しているアストリア王国兵士である事が分かる。

「雨乞いの祈祷師を何処から呼んだらしいけど」

どうやら、噂話をしているようである。

「効果あつたのかね？」

「さあなあ。でも、ここほとんど雨なんて降ってないだろ？」

「この辺は山に囲まれていて、雨雲はほとんど流れてきませんぜ？」

村人の一人が口をはさんだ。この辺境に駐屯する兵士の数は非常に少なく滞在期間が長い為、あまり村人にキツく当たると孤立してしまいやすい。その為かノーストリア村では王都のような兵士と町人の格差や対立はなく、良好な関係にあつた。

「そうなのか…」

「この辺りは霧雨ばかりでさあ。本物の雨なんて滅多に見た事ないですよ」

「次に戻るのは半年後だし…気になるなあ」

切り株の椅子に腰をおろしていた兵士が立ちあがりぼんやりと空を眺めた。

「そんな感傷なんてお前じゃ似合わないぞ」

もう一人の兵士がその姿を見て鼻で笑う。

「たまにはいいじゃないか。お前にだっているだろ？地元に残してきた女の一人や二人」

「いないな。俺ってガツチガチの…」

「ホモだったのか！」

「違う！身持ちが硬いのだ！硬派と言え！硬派と！」

誰もがそんなくだらない会話で笑いあえる。そんな平和な村だった。

雨乞いの前 その1

ある日、王家から使者が一名だけ尋ねて来た。滑らかそうな白いローブに身を包み、毛艶の良い馬に跨りやって来た。顔は30代と言ったところか。手入れされた髭が特徴的な男である。これらの特徴からそれなりの身分であることは間違いないだろう。

使者は村に駐屯している兵士の姿を確認すると、「この村に住む凄腕の占い師に会いたい」と言った。その後、村の長の案内によって主だった集落から少し離れた家に通される。それから、一時間もしないうちに要件を手短に伝え使者は足早に帰って行った。

「ばあさん、どんな話だったんだ？」

話が終わったのを見ると奥から青年が出てきて、この家の主であり凄腕の占い師と称された老婆に話しかける。

その老婆の名をジルネットという。まだ十代の頃に村に迷い込み、その占いの力で、村を住みやすい環境に変えてきたと言われる稀代の占い師らしい。この家の主に恩があり、その人物がなくなっても、ずっとここで暮らしていると言う。

「なんだ。イヴォン。盗み聞きしていたんじゃないのかい？」

「そんな人間に育てられた覚えはないんだけどな」

肩をすくめて視線を外すぐさはやや大げさか。イヴォンと呼ばれた青年の年齢は一六歳。青年と呼ぶにはまだ若い顔立ちだが、一応成人は済ませている。

「それは私が言うことだよ」

「それよりも、どんな話だったのか教えてくれよ！俺、王都の人間にすごい興味あるんだ！」

イヴォンは目を輝かせながら身を乗り出して、ジルネットに迫って行く。

「分かったよ。分かったからそこに座りな」

右手でそれを押しのけると、椅子に座るように促した。

「王国で旱魃の被害が酷くて大変なことになっているから助けくれって言う話さ」

「そんな話なら、俺も先週来た商人にそんな話を聞いたよ。でも、ばあさんに何とか出来る事なのか？」

実際に今、村人たちの間で一番流行っている噂話はこの件である。「このまま王国が滅んで隣国が攻めて来る」、「王家の親族がほとんど亡命してしまった」などなど、根も葉もない噂ばかりではあるが、王都が大変なことになっているのは間違いないらしい。

「できるよ」

と簡単に言いきってみせる。それだけ、自分の腕に自信があるのだろう。

「……でもねえ」

だが、その後の歯切れはよろしくない。

「でも？」

「まあ……なんとかするしかないさねえ」

うわ言のように呟くと自室に籠ってしまふ。イヴオンもそれ以上の追及を行う事が出来ず納得のいかない様子でその場を離れていった。

その日、日が暮れてもジルネットの部屋はランプの明かりが漏れ出していた。夜遅くまで、いや、夜明けまでその明かりが消える事はなかった。

*

朝、窓から射し込む光を遮るように頭から布団を被りベッドの中で眠りこけている人影。その背後にまた別の人影が立ちはだかり、布団を取り上げて声を掛ける。

「おはようー！」

イヴオンは芋虫のようにベッドの上をもぞもぞと転がってから、ようやく薄目を開けた。

「おはよう……シエル……」

「おはよう」

もやもやとハッキリしない視界の先から、聞こえるハッキリとしいて透き通った女性の声。顔が吐息のとどくぐらい間近にあったが、イヴオンはそれに気付いていない様子でまた寝返りを打った。

「今日は寝坊ね？何かあったの？」

「寝坊……？」

「うん。もうご飯出来てるから。起きて来てね」

それだけを言うとシエルと呼ばれた女性は部屋出て行った。

——そういえば昨晚は、ばあさんの部屋の明かりが気になって中々寝付けなかったんだっけ。

ボリボリと頭を掻きながら衣類を取り出す。着替えを済ませると部屋を出て居間を目指す。

そこには食卓があり四人の先客が椅子に座りそれを囲っていた。特に会話はなく皆もくもくと朝食をとっていた。

一人は占い師であるジルネット。もう一人は先程イヴオンを起こしに来たシエル。他に二人の少女がいる。先にも言ったが、この家の住人は五人。ここにいる四人にイヴオンを加えた五名がこの家の構成員ということになる。

「あれ。ばあさん」

「どうしたんだい？」

「昨日から籠るんじゃないかったのか？」

「昨日は調べ物してただけさ」

淡々と答えるジルネット。

——何だかいつもとは様子が違う気がする。ばあさんの機嫌と言うか。部屋全体の空気と言うか。何が原因かは分からないけれど違和感あるなあ。

「ごちそうさま！」

イヴオンが悶々としている間に、一番小さい子が一礼。それから、元気よく駆け出して行ってしまった。それに続いてもう一人の少女も無言で部屋を出て行く。

「いつまでも突っ立ってないで、早く食べな」

「あ……うん」

ジルネットに促されて、その二人に代りイヴオンが席に着く。

「今日は狩りに行かず、シエルと一緒に村から食糧を貰って来ておくれ」

村の狩人であるイヴオンは、ほぼ毎日村の狩人達と狩りに出かけている。それが彼の仕事であり日課だった。

何も言われなければ、今日も狩りに行く予定だったのだが、特に毎日参加する決まりがある訳でもない。

「うん。わかった」

深く考えもせず、イヴオンは頷く。

「シエルもいいね？」

「はい。じゃあ、アリスも連れて行きましょうか？」

とシエルはイヴオンに向き直って投げかけたが、ジルネットがそれを遮った。

「二人で行ってきな。アリスの面倒は私が見るよ」

「あ、はい。それじゃあ、お願いしますね」

説明が遅くなったが、ここノーストリア村では、複数の家族で一軒の家を使う風習があり、先程の青年と老婆は親子や親族ではなく他人である。

しかし、現在この家には五人の住人がいるが、誰一人として血縁関係にはない。そして、このような構成になっている家庭はノーストリア村でもここだけである。

つまり、この家は村の中でも特殊な環境であると言う事だ。

ここに住む者達にも一応の共通点はある。それは親、家族のない者であると言う事だ。

そして、ジルネット以外はまだ子どもの時にここに送られてきた。例えるなら孤児院といったところだろう。

何故、こんな村の外れに老婆と子どもだけを、村から離れた場所で暮らしているのか？それは追々語っていこう。

*

それはイヴオンと同じ一六歳ぐらいの顔立ちだろうか。髪は短くまとめられているが、藍系の強い髪色は珍しく気品もあるため、ノーストリアの男性には人気があった。また碧眼も独特で惹き込まれるような美しさがあり、女性からも溜め息が出してしまう程の美しさを持っている。そして、これらの特徴はシエルがノーストリアの出身ではない事を示している。

ノーストリアでは栗から金系の髪色が一般だ。それと同じような茶系の衣類を好んで着用している。シエルの着ている物も質素な長袖のシャツに上から茶系の硬い生地で作られた生地の堅いワンピースのようなものでスカートは膨らんでいる。

イヴオンはそんなシエルの横顔を眺めていた。

そして、シエルは時々イヴオンの方を向いては何でもない話題を振る。

「この前ね、南のアスタールさんの家にネズミが出たんですって」
「最近多いね」

「それで仕掛けを仕掛けたのよ。檻の中に餌を置くのを」

「僕の作ったものかな？」

「そうかもね」

イヴオンは村の狩人である。しかし、身体能力は大したことはなく、村の中でも弱い方である。

それでも、彼には狩人して恵まれた能力を持っていた。器用さである。

彼はそれを生かした道具作りや罠を張る事得意としており、村人から重宝されているのだ。その腕は「宝石の加工や彫刻の技術でも覚えれば宮廷勤めも出来るのでは？」とまで言われる程すぐれた才能を持っていた。

「それでね、一晩開けてみたら、野犬が頭を突っ込んでいて動けなくなっていたんですって」

「前にも聞いた話だね」

それは、一週間前ぐらいだったか、同様の罠を仕掛けた村人が、朝早くに「野犬が入ってるのだけど！どうしよう！？」と村のおば

さんが飛びこんできた事があつたのだ。

どうしようと言われても、殺す以外に方法はないのだが。もしかして、あの女性はネズミを捕まえて飼うつもりだったのかなどと、イヴオンの脳裏に過ぎったりもしたが、それはどうでもいい。

「でしょ？私もそう思ったの」

「また入口を狭くしようかなあ」

「それより、仕掛ける場所を考えた方がいいんじゃないの？」

「そうかも」

「イヴオンは自分の作る道具のことばかり。もっと相手の事も考えなきゃダメよ？」

シエルは得意気に人差し指を突き立てる。

「考えてはいるんだけどなあ」

気だるそうに頭を掻いてみせる。

「足りないのよ。気持ちかね」

「うゝん。気持ちねえ……」

*

「お願いします」

それから村の中央。王国兵の宿舎の隣にある食糧庫へやって来た。倉庫番らしき、髭面のおじさんにシエルがメモと籠を渡す。それを受け取ったおじさんは倉庫の中へ行くとそこに書かれている物を籠

の中へ詰め込んでいく。

この村の人々は基本的に読み書きが出来ず、このようなやり取りは口頭で必要な物を伝えるのが一般的だ。

しかし、ジルネットとアストリア王国から来た兵士は別である。そう、このおじさんは村人と同じ繋ぎを着ているがではなく王国兵であり、村の倉庫は村人ではなくアストリア王国によって管理されている。

狩りや畑作などで得た食糧は一旦倉庫に集められて王国への納税が行われる。そして、余った分が村人に食糧として再配布される仕組みになっているのだ。

何故、私服なのかと言うと、「重装備をしていると腕を上げるの辛い」とか、「倉庫の階段を上るのが辛い」とかいう理由らしい。

「ほらよ」

差し出された籠を今度はイヴオンが受け取る。籠いっぱい食べ物が詰め込まれていた。

空の時はシエルが持ち、食糧を入れたらイヴオンが持つ。二人で来るときはいつもこういう暗黙のルールになっていた。

「ありがとう。……って干し肉多いな。ばあさん嫌いなくせに何したんだ？」

「本当だ」

イヴオンに続いて、シエルも珍しそうに籠の中を覗き込む。

「だが、書かれていた物はそれで間違いないからな」

王国兵のおじさんが溜め息をつきながら視線を外す。

「……おう。そうだ、ちょっと待ってろ」

再び倉庫の奥へ消えたかと思うと、すぐに戻って来る。その手に握られていた2つの果実をイヴオンに押しつけるように強引に手渡す。

「ええ？」

イヴオンは困惑していた。それもその筈、王国兵と村人との関係は悪くないが、食糧に関してはかなり厳しい。こうしてオマケをくれる事なんて今まで経験がない上、悪い時には要求の半分ぐらいしか食糧をくれない時もあるぐらいだ。

それから、兵士はそんなイヴオンの肩を抱き寄せて、

「まあ、気落ちせず頑張れよ」

と耳打ちをした。だが、イヴオンにはその意味が理解できなかった。

*

「ふうー。ようやく着いた」

二人が家に戻るなり、イヴオンは玄関前に籠をおろして、そのまま座りこんでしまう。流石に1週間分の食料は重いし、身体に堪えたのであろう。

「大丈夫？途中で変わろうかって聞いたのに……」

「大丈夫。大丈夫。このまま隣の倉庫まで持っていくよ」

などと言って見せるものの、すっかり腰をおろしてしまっており立ちあがりそうな気配もなかった。

「よいしょ……つと」

それを見兼ねたシエルが、籠を持ち上げ覚束ない足取りで歩きはじめる。

「だ、大丈夫か？」

そんなイヴオンの呼び掛けにも反応しないまま、籠を隣の倉庫の中に入れて戻ってくる。

「流石にこれは重いね……」

少し運んだだけなのに、シエルは顔を真っ赤にして額の汗を拭いた。

「だから俺が運ぶって言ったのに」

「うっん。このぐらい大丈夫」

そんな疲れも感じさせない素振りで「ほら立てる？」と言っ感じで差し出された手を取り、イヴオンは立ち上げる。家に入るなり、

小さい女の子が駆け寄って来て、その後ろからジルネットも姿を見せた。

「シエル。ちょっと来てくれんか？」

それからジルネットはシエルに手招きをして自室に呼び入れる。

「わたしも行くー！」

家で一番小さい子も、それに付いていこうとするが、

「アリスはイヴォンの手伝いをしてておくれ」

と言われると、すぐ様「はい！」と手を上げながら急ブレーキ。そのままユーターンして勢いよくイヴォンに飛び付いた。

「何したらいいのー？」

と屈託の無い笑顔でイヴォンを見上げる。

「倉庫で食べ物の整理だよ」

そのままアリスと呼ばれた少女を抱え上げて倉庫まで持っていく。先程まで持っていた籠に比べれば、このぐらいなことない。扉をくぐる度に「天井にぶつかる」「キヤー」と言った感じの楽しそうな悲鳴を上げていた。

髪は金髪のロングで、いつも頂点にフリルのリボンを結んでいる。ノーストリア村でこんな物を高価そうな髪飾りを持っているのはアリスだけなのですぐに分かる特徴だ。それとは対照的に服装は貧相なもので、シエルの着ている物とほとんど変わらない。

ここの住人の中では最年少であり八歳になったばかりの少女。名はアリスという。

アリスは今難しそうな顔をして、あるものと睨めっこをしていた。

「食べちゃダメだよ」

「むうう……」

アリスの顔ぐらいの小さな籠の前で少女にしては低い唸り声を上げていた。その籠の中には少女の好物である野イチゴで埋め尽くされている。

「涎をたらさない！」

無意識なのかアリスの口元から零れ落ち層のになっていた水滴をイヴォンは服の袖で拭きとると、その小さな籠を、少女にはとどかない高さにある棚へと隠してしまう。

「ああー！どうしてー！！」

幼い子特有の甲高い悲鳴を上げる。

「どうしてもこうしてもあるか！仕事も終わってないのに！」

「我慢したらくれるんじゃないの！？」

「何処の番犬だ！お前は！」

イヴォンの発言で犬の真似がしなくなったのだろうか？

その後のアリスはイヴォンの腕を噛んだり、異様にじゃれ付ついてみたりと迷惑な行動をとりはじめる。片手間でアリスの相手をしなからイヴォンは一人で黙々と整頓を終わらせる羽目になるのだった。

食糧の整理が終わり家に戻ってくると、ジルネットの部屋入室禁止と言う意味のバツテンの札が吊るされており、ジルネットと一緒にシエルの姿もなくなっていた。

雨乞いの前 その2

翌朝、イヴオンはいつも通り目を覚ますとしょぼしょぼする目を擦りながら服を着る。それから部屋を出て、外にある水場へと歩いていった。

昨日は寝坊してしまったが、今日はいつも通りの朝の行動だった。

「あれ？アリス」

しかし、そこにはいつもとは違う小さな先客がいた。アリスである。

「おはようー。シエルお姉ちゃん知らない？」

この時間は朝食の準備をしているシエルがここにいるはずである。それは、イヴオンにとっても、アリスにとっても当たり前前の事である。

「いや……。俺もそれを聞こうと思っていたところだし」

「そうなんだー。お部屋にもいなかったんだよね？」

何故、アリスがそのような事を尋ねるのかと言うと、シエルとイヴオンは幼い頃から同室で暮らしているからである。

もっとも、普段からシエルはイヴオンよりも遅くまで起きており早く起きているので、朝起きたばかりのイヴオンに聞いていもわかる筈はないのだが。

「うーん……。気にしてなかった」

イヴオンが軽く首をひねる。彼はまだまだ眠たそうだ。

「おばあちゃんのお仕事手伝ってるのかなあ？」

「多分、そうなんだろうけど」

しかし、これまでジルネットの仕事を誰かが手伝ったと言う話は聞いたことないし、見た事もない。

いつもは「手伝えることなんかないよ」と言っただけで振り払われるだけなので、イヴオンはかなり納得のいつてない様子だ。

「朝ごはん、どうしよう？」

だがしかし、まだ子どもであるアリスにとってそんなことは関係ない。現状の問題は食事のことだけである。

「うーん。野イチゴでもパンに乗つけて食べるかあ」

などと答えつつも別の事を考えているイヴオンは、今度は逆方向に首をひねる。

「やったー。私、持ってくるね！」

パタパタとした軽い足音を立てながら、アリスは倉庫の方へ走っていった。

しかし、野イチゴは、昨日イヴオンがアリスの取れない場所に置いたばかりである。

「危ないから！俺が取るから！」

その事を思い出したイヴオンは慌てた様子で追いかけて行った。

*

そして、朝食。

食卓には三人の姿ある。一人はイヴオン。もう一人はアリス。そしてもう一人、二人の中間ぐらいの年齢になる少女がいた。

名はコラリー。髪はアリスよりも色素が薄く銀髪がかつた色をしている。背は年上の男性であるイヴオンとほぼ同等の高さがあり、足が長くスリムであり非常に見栄えがいい。

神話に出てくる女神のような恵まれたルックスの持ち主だが、村でも上位の狩人であり、猟犬の扱いに長けている。また狩りの最中は槍を片手に大型の獲物に飛び乗ったりもすることもあり、ルックスに反して野性味溢れる部分もある。

「コラリーも料理ぐらい覚えてくれよ」

食卓にはイチゴのジャムと野イチゴとパンだけ。何の料理もしていない。イチゴジャムをパンに塗ってアリスに手渡しながら、コラリーと呼ばれたもう一人の少女に声を掛ける。

「いや。狩りが好き」

イヴオンに向き直り話す訳ではなく、食事の手を止め話す訳でもなく、食事が続けながら淡々とした調子で答える。

コラリーの最大の特徴はこれである。滅多に人と話さないし。異常なまでに口数がすぐないのだ。その上、感情も表に出さないのが、村の女性からの評判はよろしくない。

「じゃあ、私が覚える！」

それを聞いたアリスが元気よく「はいはいっ！」と言う感じで手を上げるが、イヴオンの反応は微妙だ。

「アリスはもうちょっと大きくなったらな」

失笑と言った感じの笑みを浮かべている。

「えー」

「包丁で指切り落としてぐつぐつクッキングなど、見てる方の身にもなってみる！」

もちろん、本当にそこまでやった訳ではなくただ誇張であろう。

現にアリスの指はちゃんと十本生えている。

「ぷ……」

「お前も笑ってないでゆで卵ぐらい作れるようになれ！」

「やだ」

また、コラリーの方も料理は散々なようである。

こんな調子で朝食の時間は過ぎて、イヴオンはひとりで後片付けをする。やはり、あの二人には任せられないようだ。

「まだ帰ってこないのか？」

朝食の片付けも終わってから、家の中にいたアリスに尋ねた。

「うん」

「どうするかなあ」

そろそろ、今日の狩りに出かける時間。

イヴォンとコラリーは出かけてしまうので、家にはアリス一人が残されることになる。もちろん、ジルネットは部屋にはいるが、仕事なのでアリスの面倒など看てはくれないだろう。平和な村ではあるし日が沈む前には帰ってくるし、大きな問題になる可能性は低い。が、さすがに一人だけ残していくのは気が引けるのだろう。

「大丈夫よ。お留守番ぐらい出来るもん！」

「うーん……」

イヴォンは昨日休んでいるので、今日はあまり休みたくなかった。2日連続で休んでいる人も怪我、病気以外ではほとんどいないのが現状である。

「イヴォンが残ればいい。私が説明する」

「お前、説明できるのか？」

無表情のままコクリと頷く。その反応を見たイヴォンはあまり信用していない様子だ。それもその筈、イヴォンはコラリーがこの家の住人以外と話している姿など一度も見た事がないのだから。

コラリーの表情をジッと窺うが相変わらず無表情は変わらない。

「仕方ない。それじゃあ、頼んだぞコラリー」

悩んだ末にそれ以外にいい方法が思い浮かばなかったので、結局、コラリーに任せる事にした。

「いつてきます」

イヴオンに返事もしないまま、そう呟いて家を出ていく姿は本当に信じていいものか？と問いかけたくなるものであったが、今更取り返しは付かなかった。

*

それから、その日はアリスと村へ出て村の農業の手伝いをしていった。

イヴオンが家でアリスの遊び相手から逃れるためにとった行動ではあったが、その選択はアリスの遊び相手以上に疲れるものであった。現実とは中々うまくいかないものである。

イヴオンは川で水汲みから水撒きの繰り返し、とても地味な仕事だ。その作業者の多くが女性だがその作業はヌルいものではない。水の重さとその繰り返し、足腰腕全てに重くのしかかる。

その一方でアリスは木の棒を片手に作物についた虫を落として踏み潰す仕事をしている。「ちえすとー」などと意味のわからない言葉のたまいながら木の棒を振りまわす姿は微笑ましいものである。もちろん、イヴオンにはそれを笑顔で見守る余裕など全くない訳だが。

「これ、狩りよりキツイですよね？」

仕事も一段落して昼休み。イヴオンは二十過ぎの細身の男と一緒に食事をしていた。

「キツいかもしれないね」

イヴオンとは対称的に男は飄々としていた。

「ですよね」

「でも、失敗はしないだろ？」

「え？まあ」

「俺みたいなのが狩りに行っても何も獲れない。だったらこういう事をやるしかないんだよ」

狩り必要なものは獲物を仕留める力だけではない。獲物に出会うための運やセンス、勘なども必要になる。それでも、ただ罾を張っているだけで獲物が狩る事もあれば、一日掛けて山を練り歩いても何も出会えない事だってある。

実際に村一番の猟師でも、一週間ぐらい獲物に巡り合えない事もあるのだ。

「それに、イノシシや熊に踏まれる事もないからね」

男はおどけてみせる。

教委はそれら動物だけではない。山の奥には、その他にも毛虫や蜘蛛といった毒虫も生息しており、命にかかわるものは少ないが子どもには非常に危険である。やはり、怪我人、死者などが後を絶たなかった。

そして、成人した狩人になった者以外は山に入れない決まりになったのだ。狩人だからといって、絶対に怪我をしない訳ではないし、今でも怪我人は後を絶たない状況は変わらないのだが。

「……さて、飯の不味くなる話はこれぐらいにしようか」

「そうですね」

「午後からはもうちょっと楽な仕事にしようか？」

男はイヴオンの様子を見てそう提案する。

「俺の事なら大丈夫ですよ」

「いや、みんな疲れてるからね」

その後3時間ぐらい働くとその日の仕事は終わりになる。

アリスはいつの間にか仕事をサボって、余所の子どもと木の棒を使ったチャンバラに夢中になっていたが、所詮、子どもである。誰も期待してはいなかったし、咎める者もいなかった。

雨乞いの前 その3

「ただいまー！」

アリスが元気のいい声に合わせて勢いよく扉を開くと、勢いそのままに中へ駆け込んでいく。

「ただいま」

アリスの後に続いて帰って来たイヴオンが身体を重たそうにしながらその扉を閉めると顔を上げて、少し驚いていた。玄関にジルネツトが待っていたからだ。普段は二、三日掛かるので一日で終わっていることは非常に珍しい。

「おや、アリス。何処に行ってたんだい？」

「ミスティ君達と騎士対決してきたの！」

騎士対決。チャンバラごっこのことであろう。両手を振り上げてその実演をして見せる。

「アリス！汚れるから先に水浴び！」

「はい」

ジルネットに飛び付こうとするアリスの服の襟を引っ張る。すると、素早くユーターンして今度は外へと出ていった。

「なんだい？イヴオンもいたのかい？今日は早いじゃないか」

「今日は狩りに行ってない。アリス一人を残しておけないだろ？」

「そういうことかい」

「それよりも、シエル、知らないか？」

「ああ、シエルね……。今は寝てるよ」

ジルネットが顔を逸らしたのを、イヴオンは見逃さなかった。

「寝てる？」

「そうだよ。そんな事より早く行ってやりな。アリスが水遊びを始めるよ」

「わかったよ」

追及するのは後でもいい。そう考えてイヴオンはアリスの後を追った。家を出て裏手に回り少し歩いたところに川が流れている。その川から水を引き小さな貯め池を家の隣に作っている。そこが水場だ。

水場では、アリスは全裸になって頭から水を被っていた。アリスの長い髪から水が滴り落ちている。

「あーあ。タオル持ってきてないのに、どうするつもりだよ」

「大丈夫これで拭くから！」

それを見て溜め息を漏らすイヴオンに対して、脱ぎ捨てられた泥んこの衣服を付きだす。嫌そうな顔をしてそれを押しのけると。そこに置かれている、桶に水を汲んだ。

「先にそれを洗いな」

「はい」

返事をするなり衣服を片手に今度は貯め池に飛び込んだ。貯め池はそこまで深さはない。

「危ないからやめなさい！」
「大丈夫だよー」

アリスの腰よりもちよつと上ぐらいまでの水嵩だ。よく見るとアリスの上半身はまる見えである。年齢が年齢なのでまだパツと見で分かる程成長してはないないが、よく見ると膨らみはじめている様子が窺える。

だが、日ごろから見慣れているイヴオンは気にする気配もなく、
「早く出る！泳ぎたかったら川に行きな！」

と怒鳴りつけるだけであつた。

「あはは……はい！」

怒られても気にしていない様子で、ばしゃばしゃと水を掻いて遊んでいる。その後、イヴオンの実力行使で引きずり出されることになるのだが。

*

ジルネットの言うとおりシエルは自室で眠っていた。

日が暮れてもシエルは目を覚まさなかつた。溜め息をつきながらイヴオンはランプの灯を消して。自分のベッドに飛び乗った。帰つて来てから時間もかなり経っているし、今朝いながつた理由も聞いていない。流石に不審に思ったイヴオンはジルネットに訊ねようとベッドから降りる。もう村は寝静まっている時間。隣の部屋で眠っているであろうコラリー、アリスを起こさないように、イヴオンは

物音をたてないように自室を出て客室の奥にある。イヴオンの部屋の扉を叩く。その扉からは光漏れているので、まだ起きていることは間違いないだろう。

「誰だい？」

「俺だけ。入っていいか？」

「いいよ」

扉を開けて何へ入る。占いの部屋というだけのことであって、部屋の真ん中には大きな魔法陣。隅には調合釜やすり鉢。棚には怪しげな色合いの薬瓶。何か生き物の干物。虫の死骸詰めなどなど……とても、こんな部屋に寝泊まり出来る人間がいるとは思えないものだった。だが、一つ屋根の下で暮らしているイヴオンにとっては慣れっこだ。顔色一つ変えずに部屋の中を進み、ロッキングチェアに深く座って本を読んでいたジルネットの前で足を止める。

「なあ、もう一度聞くけど、昨日シエルって何処に行ってたんだ？」

「聞きたいのかい？」

「うん」

「聞いても後悔はしないかい？」

「え？」

ジルネットの視線が途端に鋭くなりトーンが下がる。その雰囲気がいヴオンを怯ませた。

「後悔する様な事でもあるのか？」

「あるね。私の場合だけさ」

「なら聞きたい。俺は違いかもしれないし」

即答。迷いのないその瞳はまっすぐとジルネットを捉えていた。

「そうかい。わかったよ」

ジルネットはゆっくりと息を吐いて肩の力を抜いた。

——シエルを儀式の生贄として使う。

ジルネットから出た言葉。一言だけだったが、イヴォンを驚愕させ、

「どういうことだよっ！」

憤慨させる。今にも掴みかかって来そうな剣幕。イヴォンの感情の制御能力は一瞬にして崩壊した。

「儀式には生贄が付き物さ。何回も教えてやっただろうに」

生贄。神への供物として生きた動物を供えること。供えた後に殺すもの、殺してすぐに供えるもの色々なパターンがあるがいずれの場合にしても、生贄となった者は命を落とす。

「だからって、何でシエルなんだよ！生贄なんて王都で用意すれいいじゃないか！」

「ここが何処だか知ってるかい？」

「そんなことッ」

「どうでもよくないんだよ」

「え？」

「ここに子どもが集められる。その理由を知ってるかい？」

「どういう……」

「ここには村の子どもはいない。皆、余所の子だった。その子が教

会ではなくここに預けられた。その理由が分かるかい？」

ここは占い師の住む村の外れにある屋敷。ここは身寄りのない子どもを引き取る孤児院。しかし、村には複数の家族で一軒の家を使うという独特の風習あり。滅多に孤児など出てこない。もし孤児がでてしまったとしても、その風習のお陰で、他の家があつさりと引き取ってくれるのだ。現にここで暮らしている孤児の中にこの村出身の者はいない。

——つまり

「ここはね、ここに集められた子どもはね」

イヴオンがそれを両手で遮る。

「それ以上言わなくていい！」

「いいのかい？それ知りたくて来たんだろうに」

「聞きたくないんだ！」

それ以上は、お互いに何も話すことはなかった。

静寂。イヴオンもその意味を理解したのだろう。未だに怒りは収まることなく彼の中で燦り続けていたが、それを向ける先が見つからない。

やりきれない思いを抱えたまま。イヴオンは部屋を出てようとす
るが、

「時にイヴオンや」

ジルネットは椅子を揺すり、本に視線を落したまま呼び止める。

「何だよ？」

「シエルの事は好きかね？」

「……す、好きだけど。別にそういう意味じゃないからな！一緒に暮らしてきた家族と言つか、妹と言つか……ッ！いつてえ！」

ジルネットの手にしていた本がイヴオンの顔面にぶつけられ、パサリと床に落ちる。

「こんな夜中に騒ぐでない」

「でも……」

「明日には王都へ向けて出なきゃならん。私も寝る。お前も戻って寝な」

乱暴に扉を閉めて言われるがままに自室へ戻った。イヴオンはシエルのベッドへ近づくとその顔を覗きこむ。暗くてよく見ないが、シエルはまだ眠っているようである。微かに寝息の音が聞こえてくる。

——まだ彼女は死んではいない。

「好きだ」

彼女の耳元で囁く。もちろん何の反応も帰ってこなかった。それに対してイヴオンの顔が見る見る真赤になって行く。

「ああもう！」

頭をグシャグシャと掻き毟って、むずむずするような気持を振り払おうとするが、全然効果はない。

「起きてないよな？」

それだけ確認すると、イヴォンは自分のベッドに深く潜り込んだ。

——明日、絶対何とかしよう。

そう心に決めて今は眠ることにした。

雨乞いの前 その4

翌朝。

イヴオンが目を覚ますと、もうそこにシエルはいなかった。

——もしかして、寝ている間に出て行ったのか？

ジルネットは「明日出て行く」と行っていた。しかし、出て行く時間までには聞いていない。イヴオンは覚めたばかりの意識で安易な結論を出す。

慌てて着替えをすませ足早に水場へと向かっていった。

「おはよう。乱暴に開けるからアリスかと思っちゃった」

家から飛び出てきたイヴオンをシエルが迎える。挨拶だけすると、また背を向けて朝食の準備。

シエルの向こうには焚火と鍋。煙と湯気が混ざり合い風にあおられながら空へと昇って行く。

「シエル……。いたのか」

大きく息を吐いて胸を撫で下ろす。とは言っても、彼らに残された時間は後僅かである。

「私がいるのはいつものことでしょう？」

何となく、含みを感じるような言い方。

「それは気にしないでいいや……。それよりも、ちょっと話がある

んだけど」

だから、イヴォンはこの場で話を付けようとした。

——ここから、逃げ出そう。そして、二人で暮らさないか？

彼の考えた結論はこれである。それを今から伝えるのだ。

「何？」

「ジルネットの事だけどさ……」

「イヴォンの言いたい事なら知ってるわ。生贄の事でしょ？」

「え？」

呆氣にとられたような声を出すイヴォンだが、よくよく考えてみれば、部屋に籠っている間にジルネットから知らされている可能性は大いにある。

「私もようやく誰かの役に立てるの」

イヴォンからはどんな表情をしているのか知ることは出来ないが、そう呟くように言うシエルの声はうれしそうだった。その反応は彼には予想外の事だった。

「い、今でも十分役に立ってるじゃないか」

「うーん。そうかな？」

「そうだよ」

「ありがと」

ずっと火と鍋を眺めていたシエルはイヴォンの方を振り返り顔を少しだけ赤らめて恥ずかしそうにはにかんだ。

「でもね、私、ちょっと負い目を感じるの。私には何が出来るんだろって」

「料理とか洗濯とか…できるのはシエルだけだろ？」

「村のみんなは出来る事だもの。それにイヴオンだって出来る事じゃない。私より器用でテキパキしてるし」

「でも、シエルの方が暖かいっていうか……丁寧っていうか」

器用さしか取り柄のないイヴオンにとって、それを上手に否定する事が出来なかった。自分のちっぽけなプライドがそれを許さなかったのだろうか？本来ならそのような事を気にしている場合ではないと言っのに。

「それに、私は貴方やコラリーみたいに狩りの名手じゃないし。アリスは……なんだろう？」

「何も出来ないな」

そんなところだけは、きっぱりと言い切る事が出来るらしい。

「ふふつ。そんなことないよ。きっと、あの子もすごい子になる」
「想像できないな。シエルの方がずっと良く出来た人間だし……」
「そう言われるのはうれしいよ。うれしいけど、私はもっとたくさん人の役に立ちたいの。私にはそれが出来るって知ったから」

シエルはイヴオンの目を見詰めながら、しっかりとした口調でそう言った。いや、彼女はイヴオンよりももっと遠く。ここではない別の世界を見つめている。そんな瞳だった。

「おはよー!!」

「おわっ!!」

次の言葉を探していると、不意にアリスがイヴオンの背中に飛び乗った。

「おはよう。アリス。干し肉がたくさんあったから、今日は朝からスープにしちゃった。だからもう少し待ってね？」

「はい！」

この場でこれ以上話を続けることは出来なかった。

*

その日の朝食は5人揃った食事だった
食事の前にジルネットから伝えておくことがあると言って、

「今日これから私とシエルは王都へ出かけるからね」

と切り出す。

「おおー！楽しそう」

「俺も行く！」

それに対してアリスは目を輝かせたが、対称的にイヴオンは苛立ちを隠せていない強い口調で口を挟んだ。

「馬鹿だね。アンタまで出て行ったら、誰がこいつらの面倒をみるんだい？」

アリスとコラリーを交互に指差しながらそう言い、最後にイヴオンの額を小突いた。

「帰りはいつになるか分からんが、留守を頼むからねイヴオン」

「だけど!!」

「大丈夫よ。王都までの道は安全だから」

シエルからも制止されてしまう。

——道は安全。その先はどうなるんだ？王都で儀式を行ったらどうなるんだ？俺はお前を助けたいのに、どうして……

「王都では簡単な儀式と占いをやってくる。そのお礼においしい物をたくさんもらってくるからいい子にしてるんだよアリス」

イヴオンは何も言わずに俯いていた。アリスは「はい」と何も分かっていない様子で能天気な返事をしていた。

コラリーは話を聞いてなかったのかいつの間にか一人だけ食事を始めていた。

そんな3人の様子を、ジルネットは溜め息を交えながら眺めてる。ジルネットにもまだ迷いがあるように見えたが、イヴオンがそれに気付く事はなかった。

*

村から国境方面へ少し歩いたところにある森の中。

その森の草むらの中で六人の狩人が姿勢を低くして何かを待っていた。その中にはイヴオンとコラリーもいる。アリスは前日同様、

イヴオンが農家の人に任せてきたので問題ない。

その日は狩りは兎狩り。仕掛けたら待つだけの退屈な作業だ。兎狩りと呼ばれているが、獲物を兎に絞っている訳ではない。小動物向けのトラバサミを仕掛けて獲物をとる。それは、木と弾力のある蔓を組み合わせた単純なもので、身体の大きな獲物を捕らえるには流石にパワーが足りない。逆に大きな猪などが通ると簡単に壊されてしまう。小動物でも時間があれば抜け出せるばあいもあるし、他の肉食動物に盗られることだってある。

要は、ずっと見張ってないといけない上に中々うまくいかないと言う事だ。

「そっぴゃあ、今日からジルネットのばあさんが行ったのか？これでまた、もう少し楽に生活できるようになるのかね」

グループの中にいた一人の男が、そこにいる全員に聞こえるぐらいの声でそう漏らす。その狩人は大柄の男で全く手入れのされていない無精髭が特徴の粗雑そうな印象を受ける男である。

イヴオンはその言葉に小さく反応すると、誰もいない方へ顔を逸らした。

「おっと、今日はいたのか！すまねえな」

「おい！ルマンー！！」

ルマンと呼ばれた男がイヴオンの背中を平手で二回叩く。

「どういう意味ですか？」

「どうもこうもないだろ？最近来てないのはそういうことじゃなかったのか？てつきり、シエルと二人で逃亡する計画でも立てているのかと思ってたぜ」

「おい！」

「今日がその実行日ってな」

他の狩人が止めようとするが、ルマンと呼ばれた男は構わずに続ける。

「村の人は誰でも知ってる事なんだよ。あのばあさんがいるからこの村の生活は楽なものになってる。ばあさんと生贄に使われた奴らの功績が王家の連中に認められてるんだ。お前も知ってるだろ？」
「知らなかったんだよ！昨日の今日まで。だから、だから迷ってる。いきなり言われても決められないんだ」

イヴオンは再び顔を伏せて黙ってしまふ。

「迷ったからって出来る事は限られてるし、決まってるだろ？今日もてつきり付いて行ったもんだと思ったんだけどな……」

「止められましたよ」

「それで簡単に引き下がったのか？情けないな」

「シエルにも止められたんです」

「なんだ。振られたって事か」

他の男たちからも、同様のどよめいた声があがるが、イヴオンは即刻否定する。

「違います。何で俺が振られるなんて話になるんですか？」

イヴオンの反応はあからさまだった。敵意をむき出しにしてルマンを睨みつける。

二人の間に険悪な空気が漂い始める。他の狩人達も止めるような

ことはしなくなり、ただ木々のざわめきだけが静かに響いていた。
鳥の歌声、虫の喧騒。生きた森の中で、この狩人達はいつもとは違
う緊張感に息を殺していた。

「ねえ、イヴオン」

そんな中コラリーが空気を読まずに、イヴオンの袖を引っ張った。

「何だよ？」

「獲物がかかったけど」

「あ」

コラリーの指に釣られて、狩人達が一斉に振り返る。確かに子兎
が一匹罠にかかっていた。

「早く捕って」

「わかったよ！」

促されるままにイヴオンは駆け出していく、それと同時に狩人達
の間にあつた妙な空気は消えて行った。

*

「行きたかったら、行った方がいいと思う」

獲物を縄で固定し終える頃、珍しくコラリーが口を開いた。

「今度は何だよ？」

「さっきの話。シエルが生贄の」
「ああ」

「コラリーの話が唐突で、繋がりが無い事を言い出すことはよくある事だ。今回はイヴオンも理解できる話だったが。」

「シエルを追いかけた方がいいと思う。」

「あのなあ、第一どうやって王都まで……」

「なんだあ？そんなちっぽけな事で悩んでたのか？」

ルマンが眉間に皺を寄せて、再度ルマンが割り込んできた。

「それなら、俺に任せておけ。家に確か地図があつたぞ」

と、また違う狩人が続けると、更に別の狩人も続いた。

「ああそう言えば、馬の一頭が昨日の夜に何か襲われたらしくて行方不明なんだよなあ。後で報告に行かないと……」

「お前は遠回し過ぎるんだよ！うちの馬を使ってくれ！って言えばいいのに」

更にもう一人の狩人が、突っ込みを入れる。

「うるせえなあ。通じればいいだろ。通じれば！……ってえ！」

空気を読めない二人の狩人がいがみ合いを始めるが、ルマンの手によってすぐに止められた。

「お前らは黙ってる！……で、俺達がこんだけ、後押ししてやるって言ってるんだ。お前はどうするんだ？」

つまり、ここにいる皆がイヴォンに「追い掛ける」と言っているのである。

「どうして……？」

それでも、イヴォンは困惑するばかりでそれ以上の言葉は出てこないでいる。

「迷っているなら追いかけながら考えればいい」

「そうだけ。王都までは片道三日だ。どうせ時間はある」

「みんな、イヴォンもシエルも好きだって事。もっとみんなでいたいの」

「うん……俺、行ってくる！」

コラリーの最後のひと押しを受けて、イヴォンは顔を上げて頷いた。

狩人達から歓声が上がる。そして、彼らは一気に村の方へと駆け出していく。捕った獲物の事などすっかり忘れてしまっぐらいの勢いで彼らは森を抜けて行った。

雨乞いの前 その4（後書き）

とりあえず、ここまで。

必要な情報がでてなかったりとか、情報開示の順番とか、文章力は……ないから無理かも……

色々、修正したい。

雨乞い その1

ノーストリアから山を1つ超えたところにある森の中を馬が駆け
ていく。道はそれなりに整備されており、土は踏み固められており、
時々出っ張っている樹の枝があるぐらいで、障害物もほとんどない
ようなものだった。

「コラリーまで来なくてもよかったんだぞ？」

その馬には二人の人物が跨っていた。イヴオンとシエルである。
どうやら、この二人でシエル達を追いかける事になったようだ。

「やだ」

「やだつて……な、お前。アリスだって一人じゃ不安だろうし……」

「イヴオンが残ればいい」

コラリーは相変わらず淡々としており、イヴオンには何を考えて
いるのか想像もつかない。

「でもみんな俺に期待してくれているんだし、シエルが残った方が
いいに決まってる」

「馬も操れない人に言われたくない」

その点を指摘されると、イヴオンは言葉に詰まってしまう。そう、
手綱を握っているのはコラリーで、それに抱きついてるのがイヴ
オンである。

村を出る時、本当は一人で行く予定だったイヴオンが馬に乗って
走りだそうとした瞬間に振り落とされてしまったのである。

そんな不甲斐ないイヴオンを担ぎあげて馬に乗せ、更に自らも飛

び乗ると、そのまま馬を走らせてしまったのがコラリーだった。

ノーストリア村では草木が邪魔になりやすい環境で狩りをするため、馬を使うことなど滅多にない。イヴォンが乗れないのは納得だが、何故、コラリーが操る事が出来るのかは誰にもわからない。

そもそも、ノーストリアで馬を飼っているのは、「我が国は交易の重要拠点として、商人の為に貸し出し、売買の可能な馬を用意させる」というアストリアの方策で、とりあえず飼っていただけのものであった。

「疲れたみたい、休ませる」

コラリーが手綱を引いて馬を止めると、二人はそこから降りた。

「一ついい？」

「何だ？」

コラリーの方から話しかけてくるのは珍しい。何か重要な話だろうか？

「あまり、しがみ付かないで」

「む、無茶言っな！」

「じゃあ、乗らないで」

「俺の足で追いつけるか！」

「わがまま」

呆れたジト目で溜め息ひとつ。

「ぐ……」

この場で反論しても意味がないと悟ったイヴォンは押し黙るしかなかった。

一方その頃――

「ヤダヤダヤダッ！！私も行くの！」

床に転がり手足をばたつかせて駄々をこねる少女。アリスである。

ノーストリア村では、村に一人残されてしまったアリスを誰が面倒みるのかという議論になっていたのだが、これはこれは盛り上がりのない話であつたらしい。

*

王都アストリア。

そこはイヴォンのイメージ、兵士たちに聞いた話とは全くかけ離れた世界だった。

段々とかれていく草木、荒れて行く大地。やがては乾燥した砂埃が舞い上がり視界を覆い始める道中。もう何処が整備された道なのか皆目見当もつかなくなっている。

その時点で嫌な予感からほぼ確信へと変わってしまったのはいたのだが、実際の王都を見る事でイヴォンは更なる絶望を味わっていた。

「ここでもいいのか？」

門前に打ち立てられた立て札の砂を払いそこに掲げられた文字を見る。

ノーストリア村の住人は文字は習っていないし、読み書きは出来ない。だが、多数の書物を所持しているジルネットのところで暮らしていたイヴオンは特別だ。何度か本を読んで聞かせてもらったこともあるし、読み書きの勉強をした時期もあった。少しぐらいなら自力でも読めるだろう。

——アストリア城下町

目を凝らして文字を読み取ってから、顔を上げて目の前に広がる光景を確認する。

「ここが城下町？違う世界みたいだ世界だ……」

驚きから大きく目を見開いてるイヴオンと、対称的に無感動な様子でただ隣に立っているだけのコラリ。

石畳の街並みは整ってはいないし美しくもないが、賑やかで行商人や旅芸人が占拠しているメインストリートには日が沈むまで人が絶えない。

だが、一度城門を超えると規則的に積み上げられた石壁に繊細な彫刻に園芸そこは優雅で整然とした世界に変わり、重厚な世界で妙に緊張感があると言う。

王国兵士が得意気に話してくれた内容とはまるで違う世界だった。

しかし現実には、砂漠埋まる動物の骨のような街並みであった。奥に見える城も同様の感想しか出てこないだろう。

不意に二人の耳元で予期せぬ音がした。

馬の鳴き声。足音。

イヴオンが振り返ると、見慣れない男が馬に跨り手綱を握っていた。

「まてっ！」

イヴオンが呼び止めようとするが、馬は構わず走りだす。蹴り上げられた砂が僕の視界を襲って、思わず両手で壁を作る。

「げぼげぼっ！」

砂埃も収まりその手を退かした時には、もう馬は見えなくなっていた。

「ど、どうしよう……」

「仕方ない。行きましょ」

コラリーは振り返る事もなく、開け放たれたままになっている門をくぐっていく。

もう引き返す事など出来ない。イヴオンに選択肢など残されてはいなかった。

「大丈夫かよ……」

来た道を振り返りながら小さく漏らす。

「ええい！悩んでたって仕方ない！いくぞ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5925x/>

雨乞いの後

2011年10月20日04時15分発行